

私の「国際コミュニケーション」

国際文化学科 川 竹 和 夫

私の研究経歴は、同世代の他の諸先生に比べると遙かに短い。それは大学卒業後、NHKに長く勤務し、その後大学（東京女子大学）に移って、そこから本腰を入れて研究活動を始めたからで、その期間は古希を過ぎてからの分を含めて十七年しかない。従って、私の業績などは、ずっとその道一筋に学問の道を行んで来られた「泰斗」と目される方々の足許にも及ぶべくもない。

それ故、私は与えられたスペースで、私の専門である「国際コミュニケーション」の研究に取り組むために、どのように日本と諸外国の多勢の友人・知人の協力を得て、自分の力不足を補ってきたか、を自史的に記述して、研究組織化をめざす人たちの参考に供することとした。

IBCとのかかわり

私のNHK生活は三十二年だが、当初は放送記者（経済担当）、その後、テレビニュースデスク、番組編成、コンピュータシステム担当などを経て、一九七四年に「財団法人」放送文化基金「事務局長になる。この基金は、放送に関する内外の研究や、放送文化の向上に関する

事業などに資金援助すること」を主たる目的としてつくられたもので、私は、その創立者の前田義徳氏（元NHK会長）や、財団理事の松本重治氏（当時国際文化会館理事長）らの命を受けて、欧米、アジアのマスコミ研究者と接触することと、日本からの支援を求めている各国の放送関係者への事業PRをすることの二つの仕事に忙殺されることになった。

NHK報道局時代に、多少海外取材も経験してはいるが、外国の放送の専門家達との交流はこのときが初めてで、これが私が「国際コミュニケーション」研究を志すきっかけとなった。

外国に多くの知人ができたのは、なんといつても、国際組織のIBC (International Institute of Communications 世界放送通信機構)への参加で、特に、一九七六年の京都総会では、組織委員会事務局長を勤めて、事前に本部のロンドンを度々訪問し、各国の放送分野の権威からいろいろ教わる機会を得ることができた。その頃、薫陶を受けたのは、A・ブリッグス（オックスフォード大ウースターカレッジ学長）・G・ロング（ロイター通信社長）K・フォン・ピスマルク（元ドイツZDF会長）などで、ブリッグスは、今も続いている私たちの「国際コミュニケーション」研究グループの事実上の生みの親である。

IBC京都総会では、それまでIBI (International Broadcast Institute 国際放送機構)だった組織名称がIBCに変更された。科学技術の進歩に伴って、「放送」と「通信（コミュニケーション）」の領域区分があいまいになり、コミュニケーション技術への関心が高まってきたことに対応してとられた措置で、放送界の将来像を見込んだ名

称変更といえるのだが、私は、「放送」事業が、テクノロジー先行で拡大発展を続け、「コンテンツ（番組内容）」の問題の検討がなおざりにされてゆくような懸念を感じ、この改称には反対であった。

果たせるかな、その後のIICの討議のテーマは、テクノロジーとその応用に関連するものにどんどん傾斜してゆき、また、会員もコミュニケーションサイドの人たちが増えて、放送の専門家は影薄くなっていた。インターネット時代、テレビ・デジタル化時代に入って、この傾向はさらに顕著になる。生活に不可欠な文化としてのテレビについていろんな側面から討議していた往時のIICが懐かしく思い起こされるのである。

* * *

このほか、私は、放送文化基金時代は、ABU（アジア太平洋放送連合）の会議にもしばしば出席し、アジア各国の放送機関の人たちと交流する機会に恵まれた。

そのころ、私の旧制高等学校の同級生・崖世卿君が、韓国の公共放送KBSの社長をしていて、彼に請われてKBSの職員研修の講師を勤め、それがきっかけで、韓国を訪問する機会が多くなった。後に、東京女子大学で教鞭をとるようになってから、当時東京女子大教授だった池明観氏チミンクワンと一緒に、韓国の誠信女子大学校との交流計画を実現させ、また当時ソウル大学教授だった李相禧氏イサンヒを通じて韓国のマスコミ学会に多くの知友を得、日韓両国の情報交流を活発にして、お互いの理解を深める仕事にも熱意を持つようになっていた。

七年まえから、日本マスコミュニケーション学会と韓国言論学会の

間で毎年、共同のシンポジウムを開いているが、このシンポジウムの原動力となった、両国マスコミ学者の交流は、このころ始まっている。

* * *

話は戻るが、私は一九七六年秋から、NHK放送文化研究所に移り、その後放送世論調査所長となって、都合六年間、研究管理・行政の仕事をするわけだが、そのかたわら、IIC初期に触発されたコミュニケーション研究の範囲を少しずつ広げるべく努力を続けた。

その最初が、大森幸男・内川芳美・野崎茂氏らと一緒に始めた「テレビ報道研究会」である。この会では、まだ発展途上だった「テレビジャーナリズム」について、内外の資料を集め、現場の人たちからのヒアリングをくり返して、毎年レポートをまとめ公表した（『テレビニュース研究・日本放送出版協会』）。この会は研究会というよりサロンのような雰囲気、楽しみながらの「研究？」を続けて二〇年。メンバー高齢の故をもって昨年解散した。

ITFP—JAPANの研究

さて、ここで、私が現在まだ執着を持っている、「国際コミュニケーション研究」のプロジェクト、ITFP—JAPAN (International Television Flow Project—テレビ番組国際フロー研究日本プロジェクト—事務局・NHK放送文化研究所内) について若干説明させていただく。

このITFPという名称は、IICの研究プロジェクト担当だった、

前述のA・ブリッグスの命名になる。あれは一九七八年のことと記憶するが、IIC総会の「放送に関する研究会企画小委員会」で、ブリッグスが「世界のテレビ事業は米ソ二つの軸を中心に展開し、それぞれの圏内の各国間で、国境を越える文化としての相互作用を与えつつあるが、その情報の流れはバランスを欠き、問題点が多い。早急にテレビ情報のフローを調査し、実情を明らかにする必要がある」と提案し、その場で、まずヨーロッパ圏から調査を開始することが決定した。ブリッグスの構想は、「世界の各地域ごとに、国別のテレビ番組の輸出調査を行い、これを集約すれば、最終的に、グローバル規模の「テレビ・フロー・マップ」ができあがる」というもので、ITFPヨーロッパが、地域プロジェクトの第一号となった。そして、日本プロジェクトが第二号として、アジア担当を目ざして設けられ、私と、当時NHKの主任研究員だった杉山明子^{メイコ}さん（現東京女子大学教授）が、その組織化を担当することとなった。その後、ブリッグスの下で、ラテンアメリカ・プロジェクト、北米プロジェクト、アフリカ・プロジェクトなどがつくられ、共通のマニユアル（ケンブリッジ大・チャップマン教授らの設計になる）によって、それぞれ調査が進められることになる。

日本では、短期間の「番組内容分析プリテスト」を経て、一九八〇年一年間を対象期間として「日本を中心とするテレビ番組の輸出入調査」を実施した。外国からの輸入番組については、東京のキー局七チャンネルについて、制作国・ジャンル・放送時間帯・視聴率など詳細にわたって調査し、輸出番組の方は、全制作プロダクション・テレビ

局・映画会社の協力を得て、一年間の輸出入契約の内容を調べ、輸出手国ごとに、「日本番組の使用状況」「反応評価」を聞く、という大がかりな調査になった（『テレビのなかの外国文化・日本放送出版協会』）。

私たちは、この調査結果と、「日本のテレビニュースの内容分析」の結果とを合わせて、一九八一年のIIC総会に報告したのだが、私たちと同時に調査グループを発足させた他の地域では、いずれも多くの実施上の難点を抱え、プリテスト段階で調査を断念してしまった。

結局、ITFPの名前で調査を完遂したのは日本だけとなり、テレビ番組のフロー研究としては、その後の「ユネスコの六カ国テレビフロー調査（短期間の番組内容調査。日本から、川竹・杉山が参加）」とともに国際コミュニケーション研究の貴重な資料となった（自画自賛で恐縮です。なお、同様の日本のテレビ番組の輸出入調査は、テレビの中の外国要素の分析、衛星コミュニケーションの調査を加えて、一九九三年に第二回を実施しているII『メディアの伝える外国イメージ・圭文社』）。

メディア・ステレオタイプ研究

このIIC総会での報告がきっかけとなって、私たちのグループの研究テーマはテレビ、フローの調査から、テレビ・ステレオタイプとその外国イメージの研究に移ってゆくことになる。

そのきっかけをつくってくれたのは、アメリカ・ニューヨーク市立

大学クイーンズカレッジ教授のG・ガンパートと、J・キャスカートで、彼らは、自分たちがかねて進めていた「メディア・ステレオタイプ」の研究と手法と、日本チームの番組フロー研究（特に外国要素の分析）手法をドッキングさせて、テレビによって形成される外国イメージの比較をしたい」と持ちかけ、これにフランスのTF1研究所長のM・スーシヨンらが同調し、結局、日米仏三か国の共同研究が成立することとなった。

この研究は、各国のテレビ番組の中から、典型的な相手国イメージを描いていると思われる番組（シーン・ニュースセグメントなど）を選び出し、それを自国・相手国それぞれのサンプル・オーディエンスに提示して反応評価を調査する（「普通度」「一致度」「好意度」というもので、この結果は、東京・ニューヨーク・パリと順次持ち回って公開のフォーラムを開催し、それぞれテレビ番組でとりあげられて反響を呼んだ（『ニッポンのイメージ・NHKブックス』）。

この研究結果もIIC総会に報告したのだが、そのころから、いろいろの国から共同研究の申し出が続くようになる。

結局、次の研究相手は、イギリスと決め、対象メディアもテレビの他に新聞・雑誌を加えた。イギリスとの共同調査が一九八七年、そのあと対象をアジアに移して、「日本・韓国・タイ」「日本・フィリピン」と続け、さらにヨーロッパにもどって、一九九二年から九四年にかけて、「日本・ドイツ」の共同調査を行った。このドイツとの共同研究から、私たちのグループに、ドイツ専門家の駒沢女子大の三輪晴啓教授が加わり、彼が中心になって、ベルリンと東京で、合計六回の「合同

研究会」「報告会」が開かれた（『異文化のなかのニッポン・二期出版』）。

一九九七年から、私たちは、これまでの、二国間、三国間の調査研究の実績の上に立って、多国同時の「メディア・イメージ」調査を行うこととし、次の一か国でそれぞれ共同研究者（またはグループ）を委嘱した。

アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・スペイン・
中国・韓国・フィリピン・タイ・シリア・ブラジル

この調査は、各国のメディアの伝える「日本イメージのステレオタイプ」をビジュアルな資料によって分析し、それぞれの国の人々が抱いている日本イメージとの相関を調べよう、というもので、一九九九年六月、東京で、外国の共同研究者を招いて、結果報告のフォーラムを行う。

* * *

以上が私が主として関わってきた研究プロジェクトのあらまじですが、これでおわかりいただけるように、私の研究はすべてグループ、それも外国との共同研究で、私の分担は、「チームを組織すること」「フォーラムなどの会合を企画すること」「資金を調達すること」で、研究結果の分析、報告書の作成などは、グループの共同作業であるから、個人の負担はそれほどでない。

国際研究が進むにつれて、多くの国に知友ができてゆくので、そこからくるメリットははかり知れないものがある。

また、多勢で議論しながらの研究は、即楽しみである。刻苦勉強と

という言葉があるが、私には縁遠い境地である。

*

*

*

大分以前に、ハワイ大学東西センター所長をしていたウィルバー・シユラムという高名な学者がいたが、彼は、研究グループを組織する名人で、彼の名による多くの著作は、ほとんど彼の率いるグループの研究の所産であるといわれた。シユラムは人格円満で、私たち若輩にもいつも優しく接してくれた。私にとっては大変近づきやすい存在だった。彼は、すでに故人となったが、私はこれからも、研究者としての彼のタイプに（とても及びはしないが）ならってゆきたいと思っている。